View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kyoto University Research Information Repository
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository
KYOTO UNIVERSITY

Title	フレット・エルスナー『經濟恐慌』
Author(s)	吉信, 肅
Citation	經濟論叢 (1954), 73(6): 408-414
Issue Date	1954-06
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132361
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

經濟論叢

第七十三卷　第六號

カレツキにおける獨占度概念の發展……嶋　津　亮　二　(1)

日本における金本位制の成立……眞　藤　素　一　(23)

資本理論の二つの型……前　田　敬四郎　(43)

會計檢査院編　昭和28年　會計檢査院年報…島　恭　彦　(56)

エルスナー「經濟恐慌」(紹介)……吉　信　肅　(60)

〔昭和二十九年六月〕

京都大學經濟學會

フレット・エルスナー『經濟恐慌』

Fred Oelßner, "Die Wirtschaftskrisen"

——*Erster Band. Die Krisen im vormonopolistischen Kapitalismus*——

Dietz Verlag Berlin. 1953. 308 Seiten

吉　信　肅

I

本書の著者は現在ドイツ統一社會黨（東獨）機關紙「統一」の編集長をしており、戰前「マルクス主義の旗の下に」などに寄稿し、最近は「經濟評論」一月號にもその論文が譯載されその名が知られている。

戰後、日本においてもマルクス主義の立場からの恐慌論の研究は非常に活發に行われているが、まとまった形として世に問われたものは極めて少ない。また、諸外國における動向もソヴェト同盟を除いては餘り聞くところがなかった。まとまった恐慌論として戰前にはソ同盟世界經濟世界政治研究所のメンバーの手になる、くわしい統計資料にもとづいた「世界經濟恐慌史」があるが、恐慌理論としては多くの誤謬と欠陥を含んでおり、恐慌理論のより一層の發展が望まれていた。亦、戰後我が國にも紹介されたことのあるフィグルノフの「マルクス・レーニン主義的恐慌理論」（一九四〇）、同著者の「マルクス・レーニン主義恐慌理論」（一九四八）、「資本主義的再生産と經濟恐慌」（一九四九）、メンデルソンの「一九世紀における經濟恐慌と循環」（一九四九）にしてもソ同盟において一九五〇年を皮切りにこれに對して峻烈な批判が展開されたことは周知の事實である。

本書はその初版が一九四九年に出ており、かの批判の成果の上に書きあげられたものではないし、現在我々の手にしているものがその第一卷であり、時に「前獨占的資本主義における恐慌」という副題のもとに論ぜられている事情があるにしても、今日まで四版を重ねており、部分的に深刻な分析はあるが全體的にまとまった分析の少ない我が國の現狀において、諸連關の體系的把握に對しては教えられる所が多いものと思われる。

Ⅱ

本書は二部に分けられている。その第一部はマルキシズムの恐慌理論に、その第二部は一九世紀末までの經濟恐慌小史の論述にあてられている。

第一部においては、第一章で「ブルジョア景氣論の破産」について論じ、恐慌理論におけるマルクス主義的見解の正しさを指摘している。第二章では「恐慌の可能性」を單純商品社會における基本的矛盾の展開として論述し、第三章で「恐慌の必然性」を資本主義社會の基本的矛盾の展開という見地から取扱い、本書を通ずる理論的根幹を形作っている。第四章では從來あまり省みられていない「恐慌の社會的諸結果」に理論的メスを加えている。

第二部は歴史的部分であるが、第五章では「産業資本主義以前の諸恐慌」に言及し、この時代の恐慌の性格を綜括し、恐慌の可能性との連關を明かにするなど、この著者の並々ならぬ研究の程を示している。第六章は「一九世紀の周期的諸恐慌」を取扱っているが、前半で理論的に解明された恐慌が如何に現實的に資本主義生産のメメント・モリとして周期的に現われたかということに力が注がれており、資料はその多くを從來の恐慌史から取り、ヴァルガの世界經濟恐慌史のような新資料を呈供するといったようなものではない。

以上が本書の構成である。何分續卷が見られぬことでもあり、さしあたって最も我々の興味を惹く所は、第二章、第三章の部分であろう。以下この部分の内容をよりくわしく見て行くことにしよう。

Ⅲ

(1)商品生産の矛盾。エルスナーは恐慌の可能性を説くに當って、まず單純なる商品生産の基本的矛盾から説きおこしている。この點は恐慌の抽象的可能性が單なる商品流通＝貨幣流通に基づくということから、直ちに W—G, G—W の分離を指摘するという、從來の説明とはことなっている。エルスナーは、商品それ自體に含まれた矛盾、單純なる商品流通＝貨幣流通によって生ずる諸矛盾を、單純なる商品經濟に立脚する社會の基本的矛盾の展開として把握せんとする。單純なる商品經濟にもとづいた社會の基本的矛盾は、社會的分業と私的生産との間の矛盾

である。この矛盾は更に社會的勞働と私的勞働との間の矛盾として現われてくる。個々の商品においては、これが價値と使用通値との間の矛盾として現象するのである。

(2)商品のメタモルフォーゼ。商品の二要因としての價値と使用價値の對立は、周知の如く、價値形態において外的な表現をとるのであるが、商品交換が發展するに從つて、價値の鏡たる機能は終局的に一つの確定した商品、すなわち、金或いは銀に代表されるようになり、やがて貨幣が生ずるに至る。單純なる商品經濟の基本的矛盾―私的勞働と社會的勞働との間の矛盾は、商品と貨幣との間の外的對立として明るみに出る。

貨幣の出現は商品交換の諸條件を變化させる。この條件は何かといえば、一商品が他商品と交換される前に個々の商品は貨幣への形態變換を通過せねばならないと、いうことである。ここに W―G―W という商品のメタモルフォーゼが成立する。今や、W―W という直接的商品交換が唯一の行爲であつたのに對して、W―G, G―W という二つの行爲が分離する。この商品のメタモルフォーゼの中に第一の恐慌の抽象的可能性が横わつている。個々の商品の中に包含されていた使用價値と價値との間の矛盾は、今や商品と貨幣との間の矛盾として現象している。

(3)支拂手段としての貨幣。續いてエルスナーは、支拂手段としての貨幣機能から生ずる第二の抽象的可能性を說明する。

そして、この第二の抽象的可能性は個々の資本制恐慌の現實的モメントであるとしている。後述の貨幣・信用恐慌の形態がここで與えられるのである。

(4)生產過程と流通過程との分離。商品のメタモルフォーゼによつて示された恐慌の可能性は、直接的生產過程と流通過程がちりぢりばらばらになるということにおいて一層發展するのである。特徵的なことは、エルスナーはこれを單純なる商品經濟の中において見ていることである。從つて、ここでいう生產過程は小營業にもとづいた、勞働者が同時に生產手段の所有者であるような直接的生產者の生產過程である。彼の勞働の社會的性格は生產過程においてその實を示すのではなくて、流通過程において、はじめて姿をあらわすのである。この分離は商品の物神性の基礎であり、恐慌の抽象的可能性のより一層の發展を形成する。

以上がエルスナーによる恐慌の可能性についての論述の大略であるが、(4)における恐慌のより一層發展した可能性については從來の考え方と大分異つているのが注目される。恐慌の一層發展した可能性とは內容を得た、基礎を獲得した可能性として資本の總流通過程又は總再生產過程の中に存在するものであると把握されているのが普通である。エルスナーのこの論述は、可能性を全て單純商品經濟の基本的矛盾から說明するという方法から來ているものと思われるが、この點は再考を要する所で

あろう。

Ⅳ

(1)資本制生産の基本的矛盾。恐慌の必然性は資本制生産様式の基本的矛盾から説明されねばならない。だが、その前に單純なる商品經濟の基本的矛盾が、如何にして資本制生産の基本的矛盾に生成するかが説明されねばならない。それを明かにすることが同時に基本的矛盾の説明でもある。エルスナーはそれを生産力と生産關係の照應という見地から展開している。社會的生産力の發展によつて資本制生産様式の基礎によこたわる矛盾に發展するのである。これこそ、恐慌の窮極の原因である。しかし、この矛盾は直接的には恐慌に導くことなく、やがては恐慌を呼びおこす資本制生産機式の新しい擴大した諸矛盾へと自己を展開する。この點は戰後我が國で行われた恐慌論論爭の成果と一致する所である。

(2)生産と市場との間の矛盾（過少消費と過剩生産）。エルスナーによれば、まずこの基本的矛盾は生産の無制限的擴大への傾向と市場の限られた發展との間の矛盾として自己を展開する。

エルスナーが基本的矛盾の展開を資本制生産の本質から出發させていることは正しいやり方である。市場の制限を顧みざる生産は生産過程の考察において與えられるからである。だが、ここで注意せねばならないのは、エルスナーの言う市場とは市場一般ではなく、大衆の消費手段市場であるということである。別言すれば、彼は第二部門に關連した市場をとりあげている。かかる前提を考慮に入れるならば、剩余價値の生産者としての勞働者の役割と消費者としての、市場における購買者としての彼の役割との間の矛盾からして、市場はその發展において生産の擴張と歩調を一にしないという事が生じてくる、というエルスナーの主張も理解されうるものとなる。エルスナーはここから大衆の過少消費が恐慌の本質的モメントであるという結論を導いている。だが、それはシスモンディやロードベルトスのように過少消費から恐慌を説明するものではなくして、資本制生産の無制限的擴張への衝動に對する大衆の過少消費、常に存在する過少消費からでなくして、恐慌において周期的、强力的に表現される生産と市場との矛盾から恐慌を説明するのである。

エルスナーの説明は全體として前提をはつきりさせない爲に、いささか難澁である。また生産と市場の矛盾を、いきなりかかる形で取上げる方法にも問題が殘されているものと思われる。

(3)生産諸部門間の矛盾（不比例性）。エルスナーは大衆の消費に入りこむことのない商品の問題に論を進める。これらの諸商品は資本家の需要に向けられているのである。ここで始めてエルスナーは社會的總資本の再生産と流通の問題を取扱う。生産と市場との間の矛盾は、社會的總資本の二大生産部門の不比例性として更に一層自己を展開する。生産の無制限的な擴大へ

の傾向は資本本來の性格であって、これは擴大再生産において示されるところである。

エルスナーは不比例性を資本主義の不均等發展から條件づけているのであるが、擴大再生産に示される、第一部門が第二部より一層急速に蓄積せねばならぬという事實は、常に不比例性が増大し、ガラや恐慌がひどくなるということを意味するものであると指摘している。この不比例性は強力的な方法でのみ、恐慌によってのみ一時的に解決されるのである。かくして、一方において生産と市場との矛盾は兩部門間の不比例性を促進し、他方においてこの不比例性は生産と市場の矛盾を深化させる。

マルクス恐慌理論はかくして生産の不比例性をまた恐慌の本質的モメントとして認めるのであるが、ツガン・バラノフスキーやヒルファーデングのように不比例性から恐慌を導くのではない。不比例性自體は資本制生産の基本的矛盾の發展の表現以外の何ものでもないのである。

この樣に、エルスナーはいわゆる再生産論を不比例性の問題との連關において取上げる。即ち、エルスナーによれば、表式における二部門間の不均等發展自體が不比例性を表現しているのではなくて、諸部門の不均等發展が再生産表式との關係において、不比例性を示しているのである。

エルスナーはこの後、(4)平均利潤率　(5)利潤率の傾向的低落の法則　(6)法則の内的矛盾の展開を、同樣に基本的矛盾の展開

として示しているが、從來恐慌論におけるこの分野は、一つの未開拓分野をなしており、その意味では今後の研究に資するところが多いものと思われる。

(7)信用と恐慌においてエルスナーは信用を恐慌の出現に對する一つの强力なテコ、恐慌の深化を促す一モメント、として觀察する。注目すべき指摘として、信用の本質的役割は市場とは全く關係なしに生産の高揚を促進させるものであるということ、並びに、信用制度に内在する諸矛盾は、結局、流通部面に移された基本的矛盾であって、この矛盾は基本的矛盾と同じ方法においてのみ、周期的に繰り返す恐慌によってのみ、一時的解決を見出すものであるということである。このように、信用制度、銀行制度によって生ずる諸矛盾は、一般的過剰生産恐慌の原因を深化させ、貨幣、金融恐慌を併發させるのであるが、その矛盾の爆發は、あくまで一般的過剰生産恐慌の原因ではなく一般的過剰生産恐慌の附隨現象である點が强調されている。

(8)世界市場と恐慌。外國貿易若しくは外國市場の問題は、レーニンの言う如く一つの歴史的問題である。だが、このことは世界市場と恐慌の關連を考察することを排除するものではない。問題はエルスナーによって次のように提起される。即ち、資本制生産樣式の一般的法則は、この生産樣式によって把握された全世界にとっても妥當する。然し、資本主義的世界市場が分析の對象として存在しており、かかる觀點によっては、具體的な

資本制恐慌は十分に解明されない。具體的歴史的恐慌の解明は、外國市場の恐慌に對する影響を研究することを必然的なものとすると。かくしてエルスナーは、世界貨幣の役割、個々の國民經濟の世界市場への參加、外國貿易の發展、交通機關の發展等の恐慌への影響について簡單にふれる。この問題は我が國では最近やつと取上げられるに到つた領域でもあり、くわしい研究はこれからであろう。最後に、恐慌の必然性に連關する問題としてエルスナーの力を入れているのは、(9)恐慌の周期性である。

マルクス・エンゲルスは資本制產業循環を、恐慌、不況、中位の活況、好景氣と四局面に特徴づけた。しかしながら、これらの諸局面を同じ重要性において見るということは誤であつて、常に恐慌が周期の決定的な局面であり、恐慌こそ周期の性格を規定するものである。この點をエルスナーは强調する。メンデルソンが一九世紀の恐慌史を書くに際してとつた態度は、反對に好景氣を不當に重要視し、ために批判をまぬかれなかつたことは我々の聞く所である。

この產業循環の個々の局面、また、ある局面から他の局面への推移の意義は、資本主義の全ての時代を通じて同等であると强調されてはならぬ。特に獨占資本主義の時代にとつて、それはあてはまる。エルスナーは著書の第二卷にそれを示すことを約束している。

基本的矛盾とその展開された諸矛盾からの恐慌の解明を以つてしては、何故恐慌が一定の期間において繰返されるか、という問題をまだ説明することは出來ない。循環の繼續は偶然的な、勝手氣ままなものではなくて、恐慌史に示される如く、明らかに一定の法則性を持つている。

S・ジエボンスに代表されるブルジョア理論は、この周期性の根源を決して明らかにするものではなかつた。それとは反對に、恐慌を資本制生產の必然的現象として把握するマルクス主義理論こそ、この問題を解明することが出來るのである。

產業豫備軍の成立とその時々の刻々の增減は、生產の周期的發展の不可避的前提である。併し、それはなお我々に、何故その周期が正に十年から七年續くのか、何故恐慌がかかる期間を經過することによつて繰返されるのか、ということを説明はしない。恐慌のこの周期性の基礎をマルクスは固定資本の回轉において發見したのである。併しながら、マルクスもエンゲルスも、この周期の繼續を決定的なものとしなかつた。マルクスは既に一八七三年に出版された「資本論」一卷フランス語版においてこの事を特に指摘し、その期間はだんだん短縮化すると述べている。

產業循環のこの短縮化は、その原因を、蓄積に隨伴して起る固定資本の規模の增大とその回轉の加速において持つている。固定資本の回轉は、諸矛盾の强力的解決が、何故一定の時間的繼續によつて周期的に爆發するか、ということに對する一つの

解明を與えるものである。併し、それは恐慌の周期性に對する一つの基礎を形成しはするが、恐慌自體を説明するものではない。この點こそアフタリオンに代表される、恐慌若しくはその周期を、資本主義的技術、近代的生産の物理的諸條件からのみひきだすブルジョア理論と、マルクス主義恐慌論の悉くへだたる點である。マルクス主義恐慌論は、固定資本の獨特な周期的回轉自體を、資本制生産の基本的矛盾へ引きもどして考えるのである。

最後に、エルスナーは、この固定資本の回轉は全ての産業部門、全ての固定資本の部分で同じ回轉時間を持たないにも拘らず、決定的な部門、決定的な部分（例えば、重工業部門の機械設備）で同じ回轉時間を持つことが、全産業部門、從って、全經濟活動を一定の周期において爆發させるに十分であると指摘している。

このように恐慌の周期性の問題を取扱うのであるが、エルスナーの論述は非常にすぐれた觀を得たものである。これを以つて恐慌の必然性に關する章が終つている。

V

以上、本書の構成、主要部分の内容を示した。勿論、限られた紙面でもあり、豐富な内容の一端を示したにすぎない。最初に述べた如く、部分的細目において、本書をしのぐ研究は我が國において多々あるものと思われるが、そして、本書の中にも疑問とする點は散見されるのであるが、手頃な恐慌史を含み、基本的矛盾の展開を論理的に追求せんとする、恐慌論としての構圖をとらえたものとして、更に、久しく絶えていたドイツ關係のマルクス主義理論として、本書は經濟學を學ぶ者にとつて興味あるばかりでなく、非常に易しい表現からも察知される如く、學問自體の大衆化という點においてもすぐれたものである。第二卷の發行が速かならんことを望む次第である。

（五四年三月二十八日）